

こぼれ話ー「オタマジャクシを観察しよう」

池上摩希子

0. はじめに

中国帰国者定着促進センター（以下、センター）の子どもクラスの取り組みとして、これまで、授業実践を記録し紀要やホームページに公開してきました。今回の記録はこれまでのものとはスタイルが違い、果たして「実践記録」と言っているのかどうかよくわからないのですが、センターの子どもたちの日々の生活が伝わればと思い、「こぼれ話」として紹介することにしました。

この「こぼれ話」は第61期（2000年2月～5月）の子どもクラスのうち、低学年クラスのできごとです。低学年クラスは、A女・7歳（小1）、B男・7歳（小1）、C男・7歳（小1）、D男・8歳（小2）、E女・9歳（小3）の5人（学年は出身国での在学年）です。D男がカザフスタン、他の4人は中国出身です。

低学年クラスでは、「学科」のサブプログラムのひとつに「生活科」プログラム¹⁾を設けています。この「こぼれ話」のテーマ、オタマジャクシの観察は位置付けとしては、その「生活科」プログラムのうちの「生き物の観察」という単元にあたります。この単元の学習内容・学習項目は「オタマジャクシを観察し、記録を書く。また、成長に合った環境を考える」というもので、16週間の研修のうち、第9週、12週、13週、14週に行われました。

と説明すると、いかにもきちんと授業がなされきちんと学習が進む…ように見えなくてもいいのですが、実際は私たちの思惑を軽く越えて、子どもたちはオタマジャクシとつき合っていました。

1. 観察、開始

センターでは春にはいつもオタマジャクシの観察をしている、わけではありません。本来、生活科では「植物の観察」を単元として扱って、観察記録を書いたり植物の生育環境を考えたりしています。ところが、61期の場合、

「あっ、ハツカダイコンの芽にカビが生えてる！」

「アイスランドポピーは？だめ？」

「あの子たち、水をじゃあじゃあかけるから、タネが流れちゃったみたい…」という講師たちの嘆き…植物は失敗したのです。

が、しかし、そこに救いが！

「ねえ、うちの保育園にいっぱいオタマジャクシがいてねえ、たいへんよ」

「それ、ちょうだい！」

ある講師のお子さんが通っている保育園から、オタマジャクシを分けてもらうことができたのです。観察するものができた、よかった、と早速準備を始めました。

【準備したもの】オタマジャクシ（5人×4匹＝20匹＋α）

口の広いビン、ガーゼ、輪ゴム、名札シール（各5）

水草、小石、飼料（適量）

ビンはインスタントコーヒーの空き瓶をきれいに洗って使いました。ガーゼと輪ゴムで口を覆い、飼料はアカムシの粉と鰹節、水草と小石を入れてオタマジャクシの住処です。ビンの大きさから、子どもひとりあたり4匹をあてがうことにしました。＋αというのは、不幸にして死んでしまったときの「差し替え」用として講師が備えることにしたものです。名札シールを付けるのは、植物のときも「ぼくの」「私の」と主張が激しく、「みんなで」がなかなかできなかったから。争いのもとは作るまいとしてのことでした。

2. 「さかな」じゃないよーオタマジャクシを配るー

さて、いよいよ、「配給」です。バケツに入れたオタマジャクシを見ると、子どもたちは口々に

「さかな、さかな！」

「さかな、おいです～」

「さかな、たくさん」

と言いつつ、手をつっこみました。Aだけは

『くさ～い（中国語）』²⁾

と言って、見ているだけです。

「さかなじゃないよ、オタマジャクシだよ。」

「せんせい、おたまじゃくし、何ですか。」

えっ、知らないのか。中国にもカザフにもカエルはいるよねえ。

「オタマジャクシのお父さんとお母さんは、カエル。オタマジャクシはカエルの子ども。」

「…さかな？」

だから、さかなじゃないってば。後で絵を描いて教えるとして、とりあえず、口頭練習。

「オ・タ・マ・ジャ・ク・シ、はい。」

「おたまじゃくし！」

「おたまじゃくし！」

こういうことはすぐに覚えられます。一匹ずつ紙コップですくって子どもたちのビンに入れようとする

「だめ、小さい、だめ！」

「ぼくの、大きい、いいです、大きい！」

「Cの、大きい、だめ！」

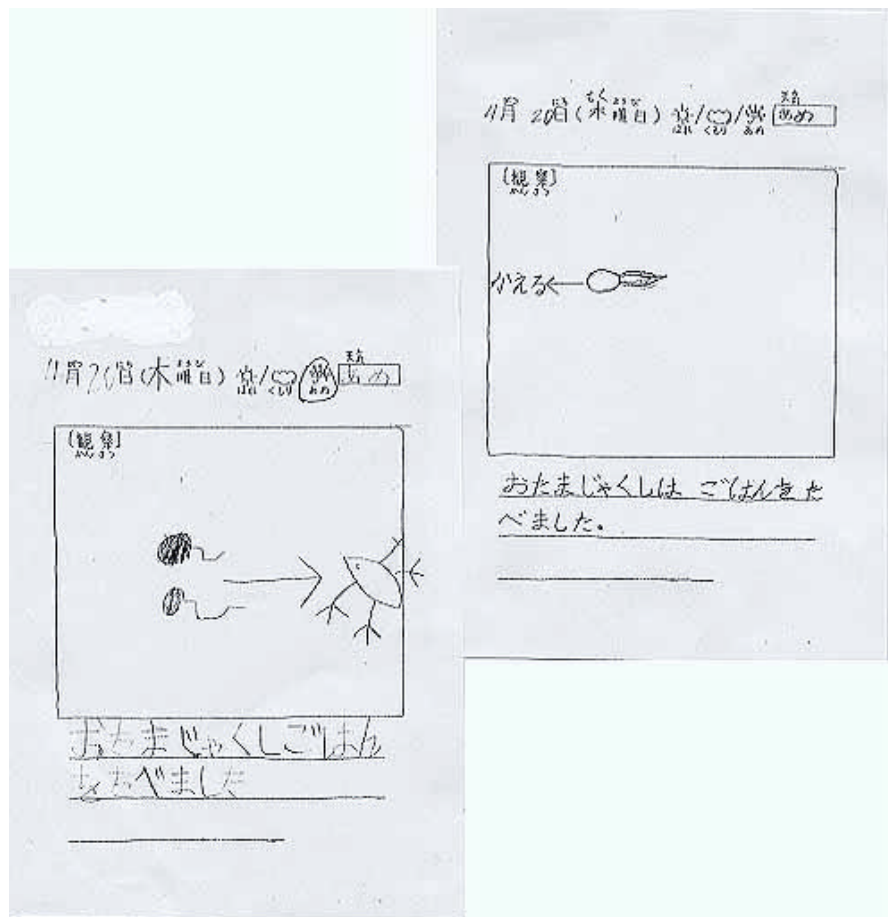
…うるさい。なるべく、大きくて元気そうなのをすくいましたが、子どもたちのビンに入れられたオタマジャクシがなんとなく衰れに感じました。

【授業記録】①

第（9）週 （5）クラス授業記録 4月20日（火） 5時限

学習内容		本時の目標
生活科 「オタマジャクシを配る」	学 科：オタマジャクシの飼育を始める	
	日本語：簡単な観察記録を書く	
授業の展開	教材	活動計画と留意点
1. 復習 ※文字や語彙の復習にあてる（教科に関係ない内容を復習する場合もある）		
2. オタマジャクシを配る 1) オタマジャクシを配る 2) 育て方の確認 3) 観察記録記入	バケツ ぞうきん ビン 名札シール マジック 記録用紙 色鉛筆	・ビンに名札シールをはる ・事務室にオタマジャクシを取り に行く ・ひとり四匹ずつ、配る ・「えさ」をやりすぎないこと →「えさ」は先生が保管する ・絵を描く ・オタマジャクシが何をしていたか、やりとりをしてからその文を書く ・たいへんそうなら、Tが例文を板書してやってもよい
3. そうじ 連絡帳の記入 宿題わたし		
気づいたこと・感想など	「えさ」ではなく、「ごはん」になってしまった。	

【観察記録の例】



オタマジャクシが配られた後、子どもたちはひとりひとつ、ピンを抱えて自分の席へ。ピンを机に置いてそれを両手ではさんで、上からじっとのぞき込んでいました。その間、教室は気味が悪いほどシーンと静まりかえっていました。

3. 一匹足りないー水を取り替えるー

それから毎日、子どもたちは朝一番に事務室（職員室）にピンを抱えてやってきます。「おはようございます。せんせい、オタマジャクシのごはん、お願いします。」しまった…最初に「えさ」と言わなかったばかりに、「ごはん」で定着してしまいました。飼料をやりすぎると食べ過ぎと水の汚れでオタマジャクシが死んでしまうかもしれない、と飼料は講師が管理することにしたのですが、おかげで毎朝、講師の机に水がこぼれています。仕方ないね、と話していた矢先のことでした。

「ねえねえ、Bくんのオタマなんだけど、なんだか一匹少ないみたいよ」という講師の発言が…。

それは、火曜に配って、土日を超した週明けの月曜の会議の席でのことでした。センターではクラス担任制をとっていますが、授業は複数の講師がチームを組んで複数のクラスを担当します。週の初めにはチームの講師が予定の伝達・確認や学習者の様子を報告する会議をするのですが、この日は減ってしまったBのオタマジャクシが話題になりました。

「えっ、どうして？…死んだかなあ」

「死んだら、自分で『死了〜』とか訴えて来ますよ。週末に家に持って帰ったんじゃないんですか」

「なんでまた一匹だけ？…ポケットに入れて持って帰ったかな…」

Bはそういうことをしそうな子です。

「まさか、他の子がとって捨てちゃったとか…そんなんじゃないといいんですが」

う〜ん、実はBはそういうことをされそうな子です。

「そんな、いじめとかじゃないといいんですけど。とにかく、しばらく様子を見ましょう。何かあったらまた報告し合いましょう」

と会議は終わりました。

ところが何日後、Bのオタマジャクシがまた一匹減っていたのです。これはおかしいなと思い、

「Bくん、オタマジャクシ、少ないね。どうしたの？」

と講師が尋ねても、Bはにこにこしているだけです。真相はわからないまま、汲み置きしておいた水を使ってピンの水を取り替える作業を予定していた矢先、また講師が気づきました。

「子どもたちのオタマのピンの水、全然、減ってないんだけど…」

ピンの水が減っていない。ということは、水道水を足しているのでは？

「水道水には塩素が入ってるから、いくらオタマでもよくないよね」
「観察記録を書く授業のときにでも、説明したほうがいいですね」
などと言い合っているうちに、次の日また別の講師が、
「目撃しました！みんなして、洗面所で直に水を足してたから、やめさせました」
そこで、生活科の授業を待たずに、水道水ではなく汲み置きの水を使うように説明することになりました。

こうしたことを伝えるためには、子どもたちの母語を使います。
『みんな、水道の水をオタマジャクシのビンに入れちゃだめなんだよ、どうしてかわかる？わかる人！』
「はい」「はい」
わかってもらえなくても、それぞれが手を挙げて発言しようとするなかで、BはVサインのように指を二本立てて手を挙げています、さも得意気に。何かわかった印でしょうか。

『じゃあ、はい、Bくん。どうしてかな？』
『えっと、洗面所で水道の水を入れると、流れていっちゃうからです』
『…何が？』
『オタマジャクシが、流れていっちゃうからです』
ここで判明した、真相でした。Bはビンに水道水を大量に入れすぎて、あふれた水といっしょにオタマジャクシを排水溝へ流してしまっていたのです。それも二度も。Vサインは「二匹」の意味だったようです。説明を担当した講師は笑いながら事務室に戻って来て、報告してくれました。

「減っちゃったからって言って、ちょうだい、とは言えないわけよね。」
いじめじゃなくてよかったけれど、哀れなのは下水に流れたオタマでした。
また別の日の朝、ビンを抱えたDを取り囲むようにして、子どもたちが事務室に入ってきて来ました。

「せんせい、おたまじゃくし、しぬ～了」
「Dくんのおたまじゃくし、死ぬ」
見るとDのオタマの中で一番小さいのが一匹、しっぽか短くなって死んでいます。どうやら、他のオタマにつつかれて死んだようです。

「あらあ、死んじゃったんだね、かわいそうだねえ」
「しぬ～了」

ちょっと無理に繰り返しをさせすぎかなと思いつつも、欲張りな先生が

「死・ん・じゃっ・た、んだよ」
と言うと、
「しんじゃった、しんじゃった」
他の子どもたちが口々に言う中で、Dはなんだか、うつむいてしょんぼりしています。
よし、お葬式だ、とその場で折り紙を使って小さい箱を作りました。死んだオタマを割り箸でつまみ出して箱に入れ、
「みんな、オタマジャクシ、死んじゃったねえ、かわいそうだねえ。ほら、これ、箱に入れて、外、外に埋めてあげようね。Dくん、だいじょうぶだよ、ね。」
とジェスチャーを交えて説明しました。Dは顔を上げ、大きな目を一層大きくして、
「せんせい、ぼくの、3、だめ～、4、4！」
自分だけ三匹なのは納得できない、次のをくれといった意味でしょう。お葬式はできませんでした。折り紙の箱に入ったオタマの死骸は、

「ごみ～」
と言われてしまい、放課後に講師が自ら前庭に埋めたのでした。「差し替え」用として講師が飼っていたオタマはこのようにして役立っていったわけです。

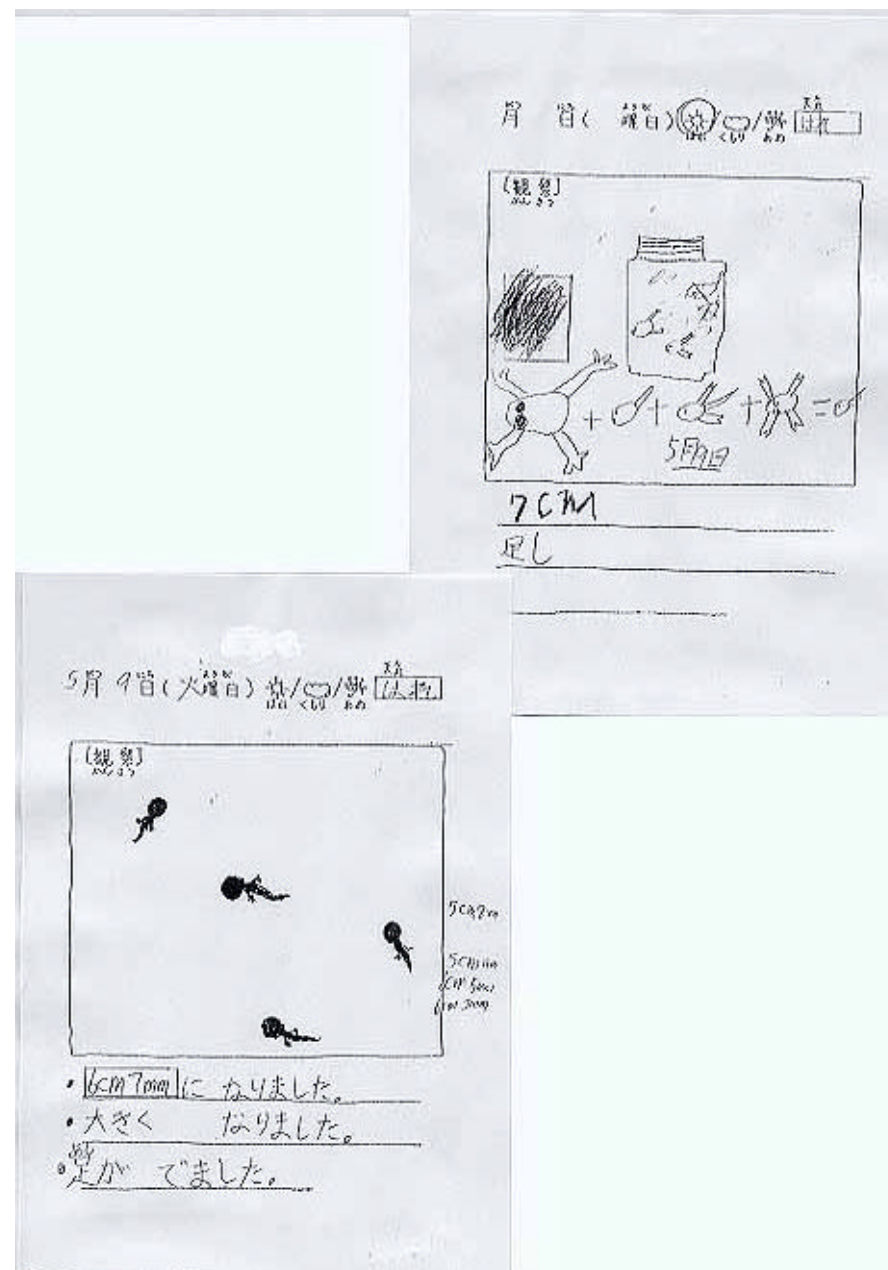
5月の連休中は、オタマを教室に置きっぱなしにはできないので、子どもたちはそれぞれビンに入れたオタマを家（宿舎）に持ち帰りました。ゼムクリップの箱に飼料を入れたものもいっしょです。もちろん、講師も「差し替え」用のオタマをペットボトルに入れて自宅に持ち帰りました。

【授業記録】②

第(12)週 (5) クラス授業記録 5月9日(火) 5時限

学習内容		本時の目標
生活科 「観察記録を書く」		学 科：オタマジャクシの水を取り替える
		日本語：簡単な観察記録を書く
授業の展開	教材	活動計画と留意点
1. 復習 ※文字や語彙の復習にあてる（教科に関係ない内容を復習する場合もある） （このときは歌を歌った。うち一曲は「かえるの合唱」の輪唱） ★担当講師のコメント →「講師も加わってなんとか。B、加わず。カエルの声のみオリジナルに発声」。		
2. オタマジャクシの水を取り替える 1) 水の交換	バケツ 紙コップ ぞうきん	・汲み置きの水を持っていく ★担当講師のコメント →「洗面所の洗い場（シンクではない方）でやったので、オタマをこぼしても拾える。みんなこぼしていた。Bくん、オタマに触れず、Aさんがすくってやっていた」。
2) 観察記録を書く	記録用紙 色鉛筆 定規	・日付と天気を記入し、絵を描く ・オタマの大きさを測る （記録の文例） 「Ncmになりました／大きくなりました／あしがでました」
3. そうじ 連絡帳の記入 宿題わたし		
気づいたこと・感想など	オタマジャクシの大きさを測るとき、拡大レンズ（ビンのこと）を通して測ることになってしまいました（Eさんがこれは「ホントじゃない」と指摘した）。	

【観察記録】



4. オタマのお家－容器を移し替える－

そうこうしているうちに、オタマには足が生え手が生え、成体（＝カエル）に近づいてきます。

「せんせい、私のおたまじゃくし、手！手、あります。」

と喜んでいるうちはよかったのですが、

「このままビンに入れておくと、溺れて死ぬね…」

という事態に。生活科「オタマジャクシの観察」、最後の授業は「成長に合った環境を考える」という課題になります。なんのことはない、ビンから浅い容器に移し替えるだけなのですが、なぜそれが必要かを考えなくてはなりません。果たして日本語で説明して、わかるでしょうか。実はこうした心配は、オタマを実際に毎日見ている子どもたちには、要らない心配だったようです。エラ呼吸、肺呼吸といったことばやその正確な意味は無理でも、ずっと水の中にいた「さかな」のようなものに手足が出て、その生き物が手と足を使って石の上にちょこんと乗っている、それを見ていけば、なんとなくわかることがあるようです。

「今日は、オタマジャクシの家を作ります」

「うちー」

「オタマジャクシは、大きくなったら、何になりますか」

「カエルー」

「そうだね、オタマジャクシは、カエルになると、水があるところと、水がないところと、両方にいます」

絵を板書してことばによる説明を補うと、

『そうそう、カエルになると地面に上がって来るんだ』

『手と足で、歩くよね』

などと言い合っています。席を離れて、手を前に足を曲げて、カエル跳びのまねをするのはCです。ぴょーん。こらこら、座って。先生のお話を聞きなさいって。

「今、みんなのオタマジャクシには、家、ありません、ありませんねー。どうしよう？だから、作ります」

「うち、ありません」

「うち、つくります」

ぴょーん。ワntenボ遅れて、BがCのまねをしました。やっと座ったCが、また、Bに負けじと飛び出します、ぴょーん。ああ、もう説明はいいから、作業にかかりましょうね。

ところが、容器と石や木ぎれを洗い、オタマジャクシを入れる段になって、Eが抵抗を示しました。

「せんせい。私のおたまじゃくし、いっしょに一、だめです。BくんCくんのおたまじゃくしと、いっしょに、だめですー」

泣きそうな、本当に嫌そうな顔で訴えます。でもさ、Dくんのといっしょはいいわけね？とは聞かないで、

「どうして？…じゃあ、EさんとAさんのオタマジャクシがいっしょなのは、いいの？」

「Aさんといっしょ、いいです。これ、だめです」

「…男の子のといっしょが、嫌なの？男の子のオタマジャクシと、いっしょは、いや？」

「おとこのこ、いや！」

そうきたか。Eは他の子どもたちより年長で学習にも熱心、常々「幼い男子」たちの所行には、世話を焼きつつも眉をひそめているといった様子が確かにありました。私のかわいいオタマがこいつらと混ざってしまったら、心安らかに成長を見守れないのよ、先生、と言いたいのでしょう。わかる気もするなあ。そのうち、Aまで

「せんせい、おとこのこ、だめ～！」

と言い出しました。そこで、こちらが取った方法は、イチゴパックをふたつ用意し、それをひとまわり大きな容器に並べて入れ、それぞれを男子のオタマ・コーナー、女子のオタマ・コーナーとする、というものでした。水を全部の容器に満たしても、ふたつの透明なパックの間をオタマは行き来できません。

「これで、混ざらないよ。ね、こっちは、AさんとEさんのオタマジャクシでしょ、こっちは、BくんとCくんとDくんのオタマジャクシ」

「せんせい、ぼく、Cくん、いっしょに、いいです。Bくん、だめ～」

いいかげんにしてよ、もう～。すぐに仲のいい者だけでくつつこうとします。仲間外れ扱いをされてもBは知らん顔、我関せずですが、

「だめだめ、そんなの、だめっ。もう、こっちは女の子の、こっちは男の子の。いいですか！」

「……」

みな、ちょっとブスッしますが、嫌とは言えない雰囲気はいつもしっかり理解できます。

さて、その後。授業に行くと、子どもたちは新しいオタマ＝カエルの住処の周りに集まっています。

「これ、わたしのカエル」

「男の子は「ぼくの」って言うんだよ、ぼくのカエル」

「ぼくのカエル」

「せんせい、これ、わたしのカエル、小青」

「シャオチン？名前なの？」

「はい、なまえ」

「ふうん、じゃあこれは？だれのカエル？名前はなんていうの」

「サーシャ。Dくんの」

「サーシャ？ロシア語の名前？」

「はい、そう」

名前をつけて区別しているけれど、ほんとに区別がついているのかどうか…といぶかっている

「せんせーい、わたしのカエル～」

と泣きそうな声で訴えるE。手足が生えてきた個体は、容器から簡単に跳び出して逃走を試みます。Aがそれをさっとつかんで容器にぽちゃんと戻しました。

「よかったね、Aさん、じょうずだね」

「Aさん、じょうず！」

初めは臭いとか言ってたけど、慣れちゃったね、Aさん。でも、今のカエルはだれのかなあ、どっちのコーナーに戻したのかなあ。男の子のオタマも女の子のオタマもしっかり混ざってしまいました。

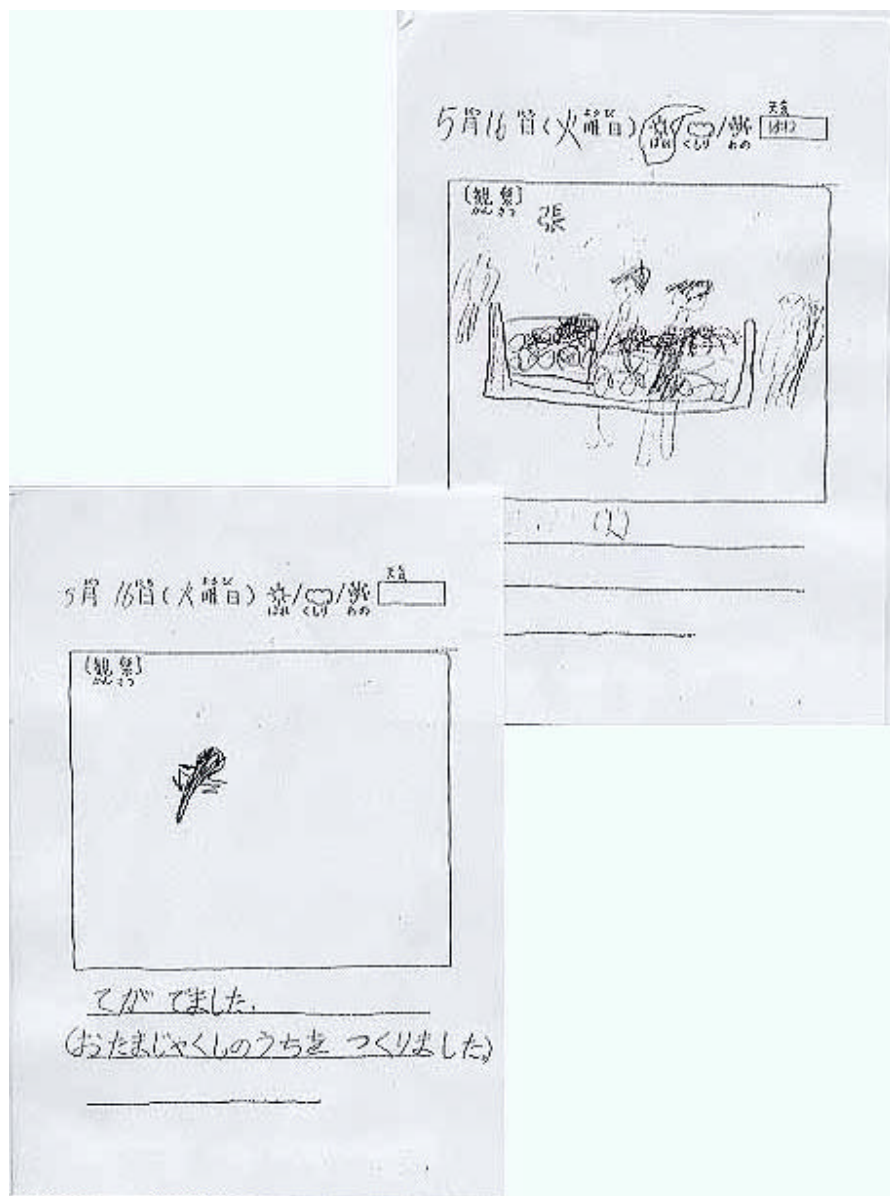
【授業記録】③

第(13)週 (5) クラス授業記録

5月15日(月) 5時限

学習内容		本時の目標	
生活科 「容器を移し替える」	学 科：成長に合った環境を整える		
	日本語：簡単な観察記録を書く		
授業の展開		教材	活動計画と留意点
1. 復習			
※文字や語彙の復習にあてる（教科に関係ない内容を復習する場合もある）			
2. オタマジャクシの「家」を考え、浅い容器に移し替える			
1) 説明 オタマジャクシを浅い容器に移す理由			・ 絵を板書して説明 ★担当講師のコメント →「なぜか納得したみたい」
2) 容器と石の準備 (外で)			・ 容器を洗う ・ 石を拾ってきて洗う ・ 容器に石を入れる
3) オタマジャクシを移す			・ 汲み置きの水を入れる ・ ビンのオタマジャクシを移す ★担当講師のコメント →「大騒ぎ。前足が出ているのは、跳びはねていた」
3. そうじ 連絡帳の記入 宿題わたし			
気づいたこと・感想など	「自分の」だったのが混ざってしまうのを最初嫌がったが、作業をしていると忘れたみたい。めでたし。		

【観察記録】



5. さようなら、オタマジャクシ！

いよいよ、授業最終日になりました。4ヶ月の研修も今日で終わり。この後修了式をして宿舎においてある荷物を発送すれば、あとは、家族毎に所沢からそれぞれの居住地へ。そこから、日本で新しい生活が始まるのです。子どもたちも役所の手続きを待って、すぐに日本の小学校に編入されることになります。

さて、みんなを楽しませ悩ませてくれたオタマジャクシをどうしましょう。
「子どもたちのオタマ、どうする？自分のって言って、持って行きたいんじゃないの」
「どれかだれのだか、もうわからなくなってるし、ほとんどカエルに近いから飼うのは難しいんじゃない？」

「そうだね、カエルになったら餌も大変だし、私たちが公園の池に逃がしてこようか」

「いやあ、それは子どもたちに自分でやらせようよ」

「じゃあ、卒業の歌で『ほたるの光』をやるよね」

「うんうん」

「『ほたるの光』を練習してから、公園に行って、そこでお別れの歌を歌って、逃がすっていうのはどう？」

「いいね～総合学習って感じ？」

「ははは、どこが？無理矢理くっつけただけでしょ」

とまあ、いつものことですが、講師たちは勝手に盛り上がり、オタマの処遇を決めていました。

最後の授業です。みんな悲しむかな…

「みんな、今日で勉強は終わりだね」

「はい」

「勉強、終わり！」

「だから、オタマジャクシと公園で、さようならしましょう」

「はい」

…意外とあっさりと公園へ向かいます。公園の池にカエルになりかけのオタマジャクシを放そうとすると、そこで釣りをしている人が気になるし、池に流れ込んでいる水路の水に触りたいしで、子どもたちは気もそぞろ、「ほたるの光」どころではありません。

「さようなら～」

「ばいばい～」

オタマジャクシは池に、子どもたちは池の周りに水路にとちりぢりになってしまいました。

「はいはい、帰ります！帰って、そうじ、そうじ！」

子どもたちだけ集めて、教室に戻りました。

公園のお別れから一週間後、私たちは子どもたちともお別れしました。関東近辺だけでなく九州や北陸へと、子どもたちはそれぞれの新しい場所へ出発しました。みんな、さよなら、元気でね。

6. おわりに

オタマジャクシ騒動で何が残ったのでしょうか。どんな日本語が身についたのか、知識はどうか…と改めて問われると、実は私は、はてさてと何も答えられません。こうした授業の効果を言うときには、なんらかの手段を講じて測るべきなのでしょうけれど、できませんでした。

言えることがあるとすれば、やはりエピソードになってしまいますが、次のような経験があります。以前センターで教えた子が、日本の小学校と中学校を経て、高校生になったとき、手紙をくれました。近況を綴る中に、

「先生、私のアサガオはまだセンターの庭に咲いていますか。」

といった一文がありました。そうか、アサガオの観察をしたんだったっけ…。何年も前のことなのに、よく憶えていたなあ。その子が修了するとき鉢を持っていけなかったので、センターの庭の隅に植え替えた、私も忘れていたことでした。

私としては、オタマジャクシ騒動を通して、子どもたちに「**時限爆弾**」を仕掛けたような気持ちでいます。それは不発に終わるかもしれませんが、それもよし、いつかどこかではじければ、何かの足しになるかもしれない。何かというのは、ことばだったり知識だったりするかもしれない。もっと欲張ると、子どもたちが学習や何か解決しなければいけない課題に臨んだとき、「これは何かな」「やってみようかな」という気持ちだったりするかもしれない、そうだったらいいなあ、などと思っています。

1) 生活科プログラムの詳細については、当センター紀要第8号を参照のこと。

2) 以下『 』内は、子どもたちの母語を表す。